

「道徳性の発達について（その2）」の前書き

関口 昌秀

これは昨年からはじめた共同研究「道徳性の発達について」の2年目である。今年は須川公央の「エリクソンにおける女性性とジェンダー（1）」が取めてある。これは、副題にあるように、「ケア」（care）概念を検討するための予備的考察である。

ここで須川は、フェミニストから批判をあげたエリクソンの女性論、「女性と内的空間」を取り上げて検討している。

須川によれば、エリクソンの女性論は、女性の身体的特徴、つまり「肉体的土台」から女性を論じる点において、フロイトの正統な継承者である。フロイトは男性性器だけで男女の発達をとらえた。その結果、男根の欠如態として女性をとらえてしまった。これに対して、エリクソンは、「男根の優位ではなく、性器の優位を主張した」。このことによって、エリクソンは、フロイトの男性優位思想をのりこえる男女平等の女性論を展開しようとした。しかし、性器という解剖学的特徴に女性の原理を置こうとしたにもかかわらず、他方において、エリクソンは、家事や育児という社会的役割まで解剖学的属性から説明してしまった。

女性の社会的役割は文化的社会的に規定されたものであり、肉体的に規定されるものではない。このような誤謬をエリクソンは犯してしまった。これは「本質主義的な性差観」がもつ誤りだ、と須川はいう。

そして、次稿で、エリクソンの批判的継承者であるギリガンの議論を取り上げて、女性の道

徳性発達と「ケアの倫理」をめぐる本質主義的な問題とその超克の可能性を検討する予定を告げて、この論文は終る。

昨年は須川の論文と私の論文の2本を載せたが、今回は須川論文1本となった。私の論文がない理由は忙しさにかまけたという以外にないが、少し言い訳めいたことを書かせてもらいたい。

正直なところ、この共同研究に2年目があるとは思っていなかった。「道徳性の発達」を継続的に研究する意図がなかったというわけではない。共同研究という形で続けるとは思っていなかったということである。現在でもわたしたちの間にこのテーマで共同研究をしていこうという約束があるわけではない。そういう意味では、実に軽いノリで出発した。むしろそういう「軽さ」ゆえに、ピアジェについての論文を書きはじめることができたのだと思う。

大学で教授する者の役目は、自分の講義する授業のテキストないし講義ノートをつくることと、そして、自分の専門領域の研究論文を書いていくことである。そう言ったのは、たしか、我妻栄だっただと思うが、大学教員の教育的役割がどんなに比重を増しても、研究を抜きにしてその職業は成立しない、というのは真実だと私も思う。本学に採用されたのは教育心理学の担当者としてだが、出自的には、私は教育哲学を

専攻した者である。教育心理学は自分の専門領域ではない。

一般論としていえば、教育哲学を専攻した者が教育心理学を教授するという事態はそれほど異常ではない。かつてマックス・ウェーバーの研究者としてその筋で名を知られた人間が、現在ユング心理学者として振舞っているという現実もある。そこにはおそらくある種のコンヴァージョン（回心）があったのだろう。しかし私が教育心理学担当者として採用されたのは、たんなる偶然、あるいは巡り合せの成せる業というべきものであって、別にコンヴァージョンという個人的自覚があったわけではない。

大学院当時、私は堀尾（輝久）ゼミのゼミナリストでもあったが、そこでは発達論をテーマとしていた。

心理学者としてピアジェやワロン、社会学者としてデュルケム、そしてマルクスなどが堀尾の関心であり、堀尾がピアジェで問題としたのはピアジェ本来の問題意識である個人の発達と社会の発展の平行性というものだった。ピアジェをたんに発達心理学者ととらえるのではなく、「発生的認識論」というピアジェ本来の思想そのものを考えることが、教育思想研究者としての堀尾の関心であった。そういう中でゼミの一員として私もピアジェやワロンの文献を読んだ。

試行錯誤と妥協の中で、私がやっと専門領域として見つけたのは、青年期教育という（社会的関心と人間発達が混じり合う）中間領域であり、当時青年期論としてもはやされたのがエリクソンであった。今でもエリクソンは青年期論を考えるときの第1準拠枠である。しかし私は、ピアジェやエリクソンに関する論文を書くほどに読んだわけではない。門前の小僧ほどには習い覚えたという程度である。

そのような事情から、教育心理学の授業では、認知発達をピアジェでやり、人格発達と青年期論をエリクソンでやった。教育心理学の標準的なテキストの内容も少し含めたが、ピアジェとエリクソンがわたしの教育心理学の中心骨格である。ピアジェとエリクソン以外できない、という開き直った気持ちといった方がよいかもかもしれない。

10年たった今でも私の授業の中心はこの2人である。多少話す内容が増えたせいで、2人について話す時間は減りはしたが、私の教育心理学では認知発達はピアジェ、人格発達はエリクソンというのが、中心骨格に変わりない。

講義をはじめて数年して、講義ノートをつくってみた。はじめると新しく勉強するものへの興味が湧くから、それを反映するようにつくり直したくなる。2008年4月からはVer.5になる。講義ノートは、最初「レジメ」として始めた。ただし「レジメ」とは言っても、全13回分で原稿用紙120枚程あった。現在では「教育心理学講義概要」と名称を改め、容量も倍増した。このテキストは、わたしが勉強したことのレポートである。「他人の禪で相撲を取る」というのが、私の授業の基本姿勢だが、「他人の禪」が学問分野の蓄積を意味する限り、それも1つの授業スタイルとして許されるだろう。

しかし、わたしの場合、そこに私の研究といえるものがまったくないわけである。だから、授業をしながら、教育心理学のペーパー（と自分で思えるもの）がないことに忸怩たる思いがある。ふつうには、我妻のいう第2課題の専門研究は、第1課題の授業の一部となっている。私の場合、教育心理学へ回心しなかったのだから、教育心理学の研究論文が生まれるはずもない。

しかし、そう強弁してみても、自分がノートをつくり、そこへの記載にあたっては一定の評

価を迫られる。やはり少しは、自分の禪で相撲を取らねばならなくなったのである。だから、「道徳性の発達」というテーマに魅かれて、かつて堀尾ゼミで文献に挙げられていたピアジェの『子どもの道徳判断』をきちんと読んでみたくなった。

大学院時代、私がピアジェをどこまで理解したかは怪しい。

堀尾ゼミでの1つの成果は、ピアジェの論述は難解だということを知ったことである。（ちなみに、ワロンはもっと難解であり、理解不能に近い。それゆえ、ワロンについて講義では触れない。）

しかし、ピアジェには、理解しやすい部分もある。その議論には正当性がある。そういう感触を抱いたのも事実である。

ピアジェの議論の正しさは、行動主義の国アメリカにおいてピアジェが受け入れられたことに端的に示されている。ただしそれは、ピアジェを発達心理学者、とりわけ認知発達の研究者として受容するというものである。ピアジェ自身は自分の研究を「発生的認識論」と呼び、発達心理学はその一部でしかない。しかし、受け入れられたのは認知発達を中心とする発達心理学の部分だけである。この部分がたしかに理解しやすい。それは、実験心理学に基いた普遍性をもっている。

道徳性発達の部分も、アメリカ的合理性の風土の中でコールバーグによって発展させられた。道徳性の発達に関するピアジェの主張も正しいといってよいと思う。しかし、道徳性の発達にどこまで普遍性を認めるかは微妙な問題となる。「道徳発達における文化的規定性」という難問に出くわすからだ。わが国の戦時下において波多野完治がピアジェの『子どもの道徳判断』の全面的な紹介を断念したことに、その問題の重要性は象徴的に示されている。

私が教育心理学の講義で扱うのは、文化的普遍性をもって正しいとされるピアジェの認知発達の部分だけであり、道徳発達は含めていない。半期2単位という時間的制約もある。教育心理学の内容として道徳発達を含めるべきかという問題もあると考えている。いやそれ以前に、ピアジェの道徳発達の主張を、私が自信を持って評価できないということが、第1の原因というべきかもしれない。

そういう状況の中で昨年偶然にも、ピアジェを読む機会を与えられたことは貴重な経験だった。やはり原典に接してはじめてわかることがある。当然他人の評価と私の感触がちがうところもある。同一の物を見ても、その色の感じ、色合いは、人それぞれに異なる。色彩感覚について、そう言われる。価値的な道徳性を扱うのだから、その判断が対立しても驚くにあたらない。ピアジェの道徳発達の捉え方に普遍性があるのか。それは大きな問題である。

それはひとまず脇において、ピアジェの主張を内容的に理解すること、それが私の当面の課題である。昨年の論文はその端緒である。